

関東鹿児島県人会連合会 平成24年度セミナーのご案内

謹啓 大暑の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。関東鹿児島県人会連合会では混沌とした社会状況の中、日本再生の原点を見つめるべく「黒潮を知ることは日本を知ること」の本を出版された稲村公望先生を講師にお招きして平成24年度セミナーとして下記の通り企画いたしました。どうぞ皆様お誘いあわせの上、ご参加くださいますようご案内申し上げます。

関東鹿児島県人会連合会
会長 内門 大行
幹事長 千葉 法子
副幹事長 豊島 敏夫
セミナー委員長 内弘志

平成24年9月2日（日） 午後：1時～（受付：12：30～）

講演：午後1時～2：30
懇親会：午後2：30～4：30分まで

講演：黒潮を知ることは日本を知ること

（黒潮が洗う島々の文化と伝統にふれて「西郷隆盛」は南洲と号した。）

フーバー大統領（アメリカ第31代）日米開戦の回想録

（ルーズベルトが日本を無理やり戦争に引きずり込んでいった。）

YouTubeで放映中 <http://www.youtube.com/watch?v=9ivjuy904Zg>

講師：稲村 公望（中央大学大学院公共政策研究科 客員教授）



プロフィール

1947年12月10日生（徳之島 天城町）

ラサール高等学校卒・東京大学法学部政治学科卒業、タフツ大学フレッチャー法律外交大学院修了。1972年、郵政省入省八女郵便局長などを歴任。郵政省通信政策局国際協力課長・郵務局国際課長。

1999年、郵政大臣官房審議官。

2001年、政策統括官（情報通信担当）。沖縄振興策として情報・通信関連産業を誘致する「マルチメディア特区」制度を提唱する。

2003年、日本郵政公社発足と同時に常務理事就任。

2001年、小泉純一郎内閣が推進した郵政民営化に対しては断固反対を主張。

2005年、常務理事就任の任期切れで理事を退任した後も民営化撤回を持論として貫いている。郷土を愛し、黒潮文化研究の一端で実際に船で奄美・徳之島を通る黒潮を探求した。 著書：黒潮文明論（株郵便研社）

会費：6,000円（講演終了後の稲村先生を囲んでの懇親パーティ費含む）

場所：四谷主婦会館プラザエフ9F スズラン

住所：東京都千代田区六番町15番町 JR四谷駅徒歩1分 TEL 03-3265-8111

連合会事務局：豊島区高田馬場3-19-11 シルバ - 高田馬場ビル4F TEL 03-3982-8655

関東鹿児島県人会連合会セミナーに I 参加 II 不参加致します。下記連絡先までFAXお願致します。
e-mail:uchi@giftbank.co.jp

氏名： _____ TEL _____ FAX _____

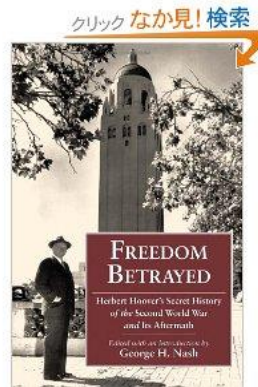
住所： _____

同伴者名 _____ 合計 _____ 名

連絡先 FAX 03-5295-2573（内弘志）携帯 090-8642-1717

FAX 03-3982-8656（鹿児島県人会連合会事務局）

平成 24 年 2 月号 月刊日本に発表



昨年十二月、日米開戦から七十周年を迎えた。その直前に一冊の回想録が刊行された。ジョージ・ナッシュ氏が編集したフーバー大統領（アメリカ 31 代）の回想録『Freedom Betrayed（裏切られた自由）』だ。ここには、大東亜戦争の歴史の書き換えを迫る重大な記録が含まれている。千頁近くにも及ぶこの大著をいち早く読破し、その重要性を指摘している稲村公望氏に聞いた。

ルーズベルトが日本を戦争に引きずり込んだ

—— 『Freedom Betrayed』のどこに注目すべきか。

稲村 フーバー大統領死去から実に四十七年の歳月を経て刊行された同書は、フランクリン・ルーズベルト大統領を厳しく批判しており、同書の刊行はいわゆる「東京裁判史観」清算のきっかけになるほど重大な意味を持つ。例えば、フーバーは回想録の中で、次のように書いている。

「私は、ダグラス・マッカーサー大将と、（一九四六年）五月四日の夕方に三時間、五日の夕方に一時間、そして、六日の朝に一時間、サンで話した。（中略）

私が、日本との戦争の全てが、戦争に入りたいという狂人（ルーズベルト）の欲望であったと述べたところ、マッカーサーも同意して、また、一九四一年七月の金融制裁は、挑発的であったばかりではなく、その制裁が解除されなければ、自殺行為になったとしても戦争をせざるを得ない状態に日本を追い込んだ。制裁は、殺戮と破壊以外の全ての戦争行為を実行するものであり、いかなる国と雖も、品格を重んじる国であれば、我慢できることではなかったと述べた」

これまでも、チャールズ・A・ビアード博士らが日米戦争の責任はルーズベルトにあると主張してきた。対日石油禁輸について、ルーズベルト大統領から意見を求められたスターク海軍作戦部長が「禁輸は日本のマレー、蘭印、フィリピンに対する攻撃を誘発し、直ちにアメリカを戦争に巻き込む結果になるだろう」と述べていた事実も明らかにされていた。しかし、ビアードらの主張は「修正主義」として、アメリカの歴史学界では無視されてきた。つまり、ルーズベルトの責任がフーバーの口から語られたことに、重大な意味があるのだ。

『フーバー回想録』には、対日経済制裁について次のように明確に書かれてい

「…ルーズベルトが犯した壮大な誤りは、一九四一年七月、つまり、スターリンとの隠然たる同盟関係となったその一カ月後に、日本に対して全面的な経済制裁を行ったことである。その経済制裁は、弾こそ撃っていなかったが本質的には戦争であった。ルーズベルトは、自分の腹心の部下からも再三にわたって、そんな挑発をすれば遅かれ早かれ（日本が）報復のための戦争を引き起こすことになる」と警告を受けていた」

天皇陛下の和平提案を退けたルーズベルト

—— まさに、ビアードらの主張を裏付けるものだ。ルーズベルトは日本を無理やり戦争に引きずり込もうとした。彼は真珠湾攻撃前から日本本土爆撃を計画していたともいう。

稲村 アラン・アームストロングは、『「幻」の日本爆撃計画—「真珠湾」に隠された真実』の中で、真珠湾攻撃の五カ月前にルーズベルトが日本爆撃計画を承認していたことを明らかにした。その計画は「JB—355」と呼ばれるもので、大量の爆撃機とパイロットを中国に送って、中国から日本本土を爆撃しようという計画だった。

『フーバー回想録』は、「スティムソンの日記が明らかにしたように、ルーズベルトとその幕僚は、日本側から目立った行動が取られるように挑発する方法を探していたのだ。だから、ハルは、馬鹿げた最後通牒を發出して、そして真珠湾で負けたのだ」と書き、ルーズベルトが近衛総理の和平提案受け入れを拒否したことについては、次のように批判している。

「近衛が提案した条件は、満州の返還を除く全てのアメリカの目的を達成するものであった。しかも、満州の返還ですら、交渉して議論する余地を残していた。皮肉に考える人は、ルーズベルトは、この重要ではない問題をきっかけにして自分の側でもっと大きな戦争を引き起こしたいと思い、しかも満州を共産ロシアに与えようとしたのではないかと考えることになるだろう」

徳富蘇峰は、「日本が七重の膝を八重に折って、提携を迫るも、昨年（昭和十六年）八月近衛首相が直接協商の為に洋上にて出会せんことを促しても、まじめに返事さへ呉れない程であった。而して米国、英国・蒋介石・蘭印など、いわゆるA B C Dの包囲陣を作って蜘蛛が網を張って蝶を絞殺するが如き態度を執った。而して、彼等の頑迷不靈の結果、遂に我をして已むに已まれずして立つに至らしめたのだ」（『東京日日新聞』一九四二年三月八日付）と書いていたが、七十年という歳月を経て、ようやく『フーバー回想録』によって、蘇峰の主張が裏付けられたのだ。

フーバーは、さらに重大な事実を記録している。

天皇陛下は、一九四一年十一月に駐日米国大使を通じて、「三カ月間のスタンスティル（冷却期間）をおく」との提案をされたが、ルーズベルトはこの提案をも拒否したと書いている。アメリカの軍事担当も、冷却期間の提案を受け入れるべきであるとルーズベルト大統領に促していたのだ。

フーバーは、「日本は、ロシアが同盟関係にあったヒトラーを打倒する可能性を警戒していたのである。九十日の冷却期間があつて、（戦端開始の）遅れがあれば、日本から“全ての糊の部分”を取り去ることになり、太平洋で戦争する必要をなくしたに違いない」とも書いている。

当時、アメリカでは戦争への介入に反対する孤立主義的な世論が強かった。ルーズベルトは欧州戦線に参戦するために、日本を挑発し戦争に引きずり込んだのである。日本国内にも日本を日米開戦に向かわせようとする工作員が入りこんでいた。実際、リヒャルト・ゾルゲを頂点とするソ連のスパイ組織が日本国内で諜報活動を行い、そのグループには近衛のブレーンだった尾崎秀実もいた。

—— ルーズベルト自身、反日的思想を持っていたとも言われる。

稲村 彼は日系人の強制収容を行い、「日本人の頭蓋骨は白人に比べ二千年遅れている」と周囲に語るなど、日本人への人種差別的な嫌悪感を強く持っていたとも指摘されている。